

---

# 神と精霊に愛された少女

篠山 光

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

神と精霊に愛された少女

### 【Nコード】

N2559T

### 【作者名】

篠山 光

### 【あらすじ】

これは神様のミスによって殺されてしまった少女の物語。少女は神の提案により、剣と魔法の世界【ラスタリア】に誘われ、転生した。彼女はその世界で暮らすうちに精霊とも仲良くなり、世界を旅することになった。

神様のミスで殺されてしまった少女の世界を旅する物語！

一作目「姉は魔王、妹は勇者になっちゃった?!」と並行して更

新するので更新が遅くなってしまつかもです (^| ^ ;)

神との邂逅（前書き）

どうも！篠山 光です

2作同時進行で進めていきたいと思ひます

よろしくお願ひします

何か指摘等あれば忠告してくれるとありがたひです

5月20日訂正しました

## 神との邂逅

ある山の奥深くに13歳の少女が76歳の祖母と一緒に暮らしていた。

少女は至って普通の女の子だった。友達と一緒に学校に通い、一緒に遊び、よく食べよく寝る。

そんな少女が16歳になったころ、これまで一緒に暮らしていた祖母が病気で他界してしまった。

祖母の死を悲しんでいると、突然胸のあたりに鋭利なもので刺されたような激痛が走った。痛む場所をみると

なにもなかった。

そして気がつくとき白い空間にふわふわと漂っていた。

「ここ・・・は？」

少女・神菜 明日香（かみな あすか）が咳くと広い光が少女を包み込む。

今度はあたり一面空模様の部屋に立っていた。

『目を覚ましましたか』

不意に背後から女性の声が聞こえた。

「あなたは？」

『私は神です』

「神様？」

『はい』

・・・ほんとに神様なのかな？

『あなた今ほんとに神様なのかな？って思ったでしょ！』

「ふえ！なんで分かったの?!」

明日香が目の前にいる神様が本物なのか疑ったのはある意味当然のことである。

なぜかというと、身長が明日香よりも小さく、年も13歳くらいなのだから明日香が疑うのは無理もない。

『だってここは神の集う場所だからよ』

「神の集う場所だから私の思っていたことが神様に伝わったの?」

『うん、そうよ』

「そうなんだ。ところで私はなんでここにいるの?」

『それについてなんだけどね?ひとつ謝らないといけなことがあ  
るの』

「謝らないといけなことが?」

『貴女がここに居る理由は私たち神の失敗で貴女を殺してしまった  
からなの』

私は神様の口から発せられた理由に驚きを隠せなかった。

「え・・・神様の・・・失敗で・・・私・・・死ん・・・だの?」

『はい。本当にごめんなさい』

神様は申し訳なさそうに謝罪した。

「・・・いいですよ」

『え・・・。いいんですか?私たちのミスで貴女を殺してしまった  
のにですか?』

「いいんです、もう。私には家族なんていないんですから・・・。

私がいなくなつて悲しむ人なんか・・・いないですよ」

『貴女を異世界へ誘いざないましょうか?』

神様の提案に私はぼかんとする。

「異・・・世界・・・?」

『はい。魔物と呼ばれる生物が闊歩する剣と魔法の世界【ラストリ  
ア】ならば誘うことができます』

「魔物」と聞いて私はぞつとした。

「あの、その世界には人間は住んでないんですか?」

私はふと思った疑問を口にした。

『人はちゃんと存在してます。でも、言葉は通じるけど文字は通じ  
ないんです・・・すいません』

「あ・・・い、いえ、その・・・謝らないでください」

神様に謝罪されて私はあわてた。

それはそうだろう。普通に暮らしていた一般市民が人間よりはるかに偉い神様に謝られるのだ。その神様に謝られてあわてないほうがおかしい。

「それに少し魔法に興味があるんです。だって私がいた世界じゃ夢物語ですし」

『・・・ありがとう。そう言ってくれと私も救われます』

「・・・でも異世界に行けば知らない人しかいないんだよね？」

『そうですね・・・。もしあなたがいいのでしたら私も付いて行ってもいいですか？』

神様の発言に私はとても驚いた。

「え！いいんですか?!」

『貴女が許可して下さいね・・・私たちのミスで貴女を殺してしまったのに貴女を何も知らない世界に放ってそれで終わりじゃ申し訳が立たないですし、ですから私も一緒に行ってもいいですか？』  
にわかには信じがたいが神様の目を見ると真剣だったので私も真剣に考える。

自分の中で答えがまとまると深呼吸して心を落ち着け、答えた。

「はい、一緒に来てくれませんか？私ひとりじゃ心細いですし何より神様の誘いを断る理由なんてどこにもありませんよ」

私はさすがのような眼差しを向けている神様に優しく微笑みながらお願いした。

『よかった・・・拒否されたらどうしようかと思ひ、はらはらしていました』

神様は張り詰めていた顔を緩め、同姓であつても魅了する笑みを浮かべた。

「じゃあこれからよろしくお願いしますね」

笑みを浮かべながら神様に向けて手を差し出す。神様は手を取り「これからよろしく」と言った。

『じゃあ行きましようか。剣と魔法の世界【ラストリア】へ・・・』  
神様の言葉が言い終わると同時にあたりが光に包まれた。

神との邂逅（後書き）

感想待ってマース！

## 初めての異世界、初めての魔法（前書き）

お気に入り登録して下さい  
お気に入り登録して下さっている人たちを満足させるために頑張りますっ！

## 初めての異世界、初めての魔法

光がおさまると私は森の中にいた。

「ここが【ラスタリア】ですよ」

いきなりだったので私は吃驚<sup>びっくり</sup>した。

「ひゃっ！びつくりした。ん？神様、なんで透けてるの？」

神様をみると神様の向こう側にある木が見える。

「私は神様だから世界に干渉することは出来ないんです。でも霊体なら大丈夫なんですよ」

「そうなんだ。あ！ねえねえ、ここって魔法使えるんでしょ？」

「はい、使えますよ」

「じゃあ、魔法の使い方教えて！」

「この世界では精霊の力を借りて魔法を使っんです。火の魔法なら火の精霊『イフリート』、水の魔法なら水の精霊『ウンディーネ』といった精霊の加護のもと執行します」

神様の言葉に私はしょんぼりした。

「じゃあ、精霊の加護がないと使えないの？」

「地水火風の4大属性と雷、光、闇はそれぞれを司る精霊と契約しないなりません。私が時は時空魔法、回復魔法、精神魔法を司ります。ですので時空、回復、精神魔法なら使えますよ。」

今度は逆にわくわくしてきた。

「じゃあその3つ教えて下さい！」

「分かりました。では、此方こちらに来てください。」

神様はにっこりほほ笑む。

「魔法の大切なことはイメージです。次に成功させようという気持ち、この2つがなければ魔法なんて扱えません。」

私は頭にメモをとりながら真面目に聞く。

「えっと、イメージと成功させようという気持ちが大事っ」と

「はい、それらが合わさって初めて魔法を行使することができます。それでは実践してみましようか。」

「え、それだけですか？」

「それだけと貴女は言いますがこれらの魔法はこの世界では最も難しい魔法として有名なんですよ?。」

「む、この世界で一番難しい魔法・・・。」

「そんなに難しく考えずにもっと気楽に考えて下さい。私の加護が

あるんですからきつと成功しますよ」

「うん、わかった。やってみますね」

そう言うと私は目を閉じ、深呼吸して空間を裂いて亜空間を作り出すイメージをする。

私はこれを出来る、やれると自分に言い聞かせながら無意識に魔力を練りこむ。

そして、ゆっくり目を開けるとそこには縦が2m、横が60?くらいのドアがあった。

「もしかして貴女、時空魔法の亜空間を作ったの？」

亜空間を作り出した私に神様は信じられないといった感じに問いかけてきた。

「はい、イメージで来てちゃんと使えたかどうか確認できるのはこれくらいかなって思って・・・」

なぜか怒られてるような錯覚で言葉が尻すぼみに声が小さくなっていく。

「すごいですね！ほかの魔法使いはこの魔法を使えなくて伝説上の魔法となっているのに初めて使った魔法で亜空間を作り出すなんて！」

作り出した本人の私にはあまり伝説上の魔法を使ったという実感はわかかなかったが、神様の言葉で少し自覚できた。

「ありがとう」

ここで辺りが暗くなってきたので今日の魔法講座はお開きとなった。

初めての異世界、初めての魔法（後書き）

感想や批判、おススメの小説など待ってマース！

## 精霊との邂逅（前書き）

書いてる途中に本文が消えてしまったのでやる気をなくしてかなり短くなってしまい足した・・・

明日は今日の分を取り返すがごとく長めにしようと思います

## 精霊との邂逅

私たちはしばらくこの山で暮らすことになったため、雨風をしのげそうな場所を探していた。

この山で暮らすことになった理由はそのまま山をでると町に居る人があわてるからだそうだ。この山はいわくつきで『一度入ると二度と出ることは叶わない』とされていて間違っって入ってしまった場合でも二つだけこの森を出られる方法がある。一つ目はこの地に住まう地の精霊との契約、もうひとつは正しい道をたどることだ。正しい道などこの入り組んだ地形で探し出すことなど不可能に近いのでそれらも相まって先のような噂が流れたのである。

「この森、入り組んでて疲れるよ。それにしてもシャルルはいいよねー、実体ないから浮かんでるだけで全く疲れないし」

私は嫌味を含めて言った。

「それは私が神ですから仕方のないことですよ」

・・・嫌味を嫌味で返された。

これには反論出来ないの押し黙るしかない私である。

「・・・それで、植物たちにこの付近に雨風しのげるところあるか聞いた？」

「・・・このまままっすぐ行けば精霊たちの住まう祠があるそうですよ」

「じゃあ、そこに居る精霊さんたちに少しの間だけ泊めてもらえるか聞いてみようか」

そして私たちは精霊たちの住まう祠へ向かって行ったのだった。

## 精霊との邂逅（後書き）

批判や感想、おススメの小説待ってマース？！

## 精霊の住処（前書き）

そろそろ中間テストが始まります・・・

ま、それに向けて勉強などそこらに居る優秀な生徒とは違い全くしませんがwww

では、読みづらい文だと思いますがお楽しみあれ

5月20日タイトル訂正

内訳：「精霊との契約」「精霊の住処」

## 精霊の住処

「……ここ？」

「……どうやら、そのようですね」

私は表情を引き攣らせながらシャルルに尋ねた。

なぜ、私が表情を引き攣らせたのかというと目の前にあるのは祠ではなく立派な洞窟だったからだ。

「精霊さんは祠だって言ってたんでしょ？」

「ええ、間違いなく『少し大きい祠』だと言っていました……」

……精霊さんの少しは少しじゃないよ

私たちが祠の前で立ち尽くしていると中から見るからに偉そうな精霊さんが此方へ寄ってきた。

『我ら精霊たちの住処に何用じゃ？』

警戒心たつぷりな物言いにたじろぐ。

「え！ええと、その、少しの間だけ精霊さんたちの住処に居候させて貰えないかと思ってきました……」

話している間にほかの精霊さんたちがぞろぞろと祭りを見るような雰囲気を漂わせながら集まってきたのでどことなくアウェイ感を感じ、尻すばみに声が小さくなっていき、最後のほうはちゃんと聞きとれたか分からないくらい小さかった。

『なに？我らの住処に居候させてほしいとな？』

その精霊さんの言葉に集まっていた精霊さんたちのうちの一人が

『いいんじゃないですか？長老。その可愛い嬢ちゃんと俺も話したいですし』

というと、その近くに居た精霊さんが

『といって襲うんじゃないかねえだろうな？』

と冗談交じりに言っていると周りに居た精霊さんたち全員がどつと笑いに包まれる。

『そ、そんなわけないぞ！』

『どこまで本気なのやら。長老、あつしもその嬢ちゃんと話してみ  
てえつす。だから、少しの間くらい居候させてやってもいいんじゃない  
ですかい？』

他も精霊さんたちもみんな話してみたいと言いながら頷く。

「私からもお願いします」

ここまで沈黙を保っていたシャルルが口を開くと

『ん？もしやそなたは・・・』

長老精霊さんはシャルルの声を聞いた瞬間、信じられないような表  
情を浮かべた。

「はい、あなたの思っている通りですよ」

『どこか懐かしい感じがその娘からすると思ったら神どのがついて  
いたのですか』

よくわからないような表情を浮かべているとシャルルが説明してく  
れた。

その昔、世界創生の時にシャルルはこの地に地水火風のほかに雷、  
光、闇のそれぞれを司る始祖精霊を生み出し、それぞれに名前を与  
え、この世界に解き放ったのだ。

地の精霊【ノーム】はこの森へ、水の精霊【ウンディーネ】はこの  
世界のどこかにある聖なる泉へ、火の精霊【イフリート】はこの世  
界のどこかにある聖なる火山へ、風の精霊【シルフ】はこの世界の  
どこかにある天空島へ、雷の精霊【ヴォルト】はこの世界のどこか  
にある岩山へ、光の精霊【アスカ】はある国へ、闇の精霊【シャド  
ウ】は魔物の住む地へと。

その際、ほかの神の邪魔が入り、穏やかだったはずの魔物が凶悪化  
してしまったりしたらしいが。

「世界創生にはそんなことがあつただ〜」

私はこの世界の創生の時にそんな裏話があつただ〜と感心した。

『うむ。我は神どのに感謝しておる。神どのが生み出してくれなけ

れば今の我はおらぬからな』

「そんな大層なことはしておりませんよ。それと自己紹介がまだでしたね。私はシャルルと言います。名前は此方に居る子につけてもらいました」

シャルルの言葉を聞いた長老は頭を抱え

『神どのに名前を付けるなど恐れ多い・・・』

と呟いていたが、明日香の耳には届いていなかった。

「私は神菜 明日香です。いせ」

そこでシャルルに遮られた。

「その話はしなくていいですよ？」

「そう？じゃあ言わない」

『今度は我が挨拶する番じゃな？我は先のシャルル殿の話にあった通り始祖精霊のノームじゃ。この森に住む精霊たちの長をしておる』

「それで、少しの間ここに居候させてもらってもいいですか？」

私が再び尋ねると

『そなたならいいじやろう。普段は人間に対して警戒しかせん精霊たちまでそなたと話したいと言っておるしな。それだけで信用に足るしな』

・・・思ったより気さくな精霊さんだな

『誰か、この者たちを中に案内せい』

長老の号令で私の近くに居た優しそうな精霊さんに案内され、祠の中に入って行った。

## 精霊の住処（後書き）

今日の更新はここまでになります。

長めにするって言うっておきながらおとといとあまり変わらないよね？  
な？

・・・気にしたら負けだな。うん

明日もこれくらいの時間に更新すると思います

## 少女たちのこれから（前書き）

更新がとても遅くなってしまいましたorz

最近なかなかネタが思い浮かばないので・・・

次回は出来るだけ早く更新できるように頑張りますっ！

## 少女たちのこれから

明日香とシャルルは精霊に案内された部屋で寛くわんいでいた。

「これからどうする?」

私はベッドに寝転び、ぼんやりと土の天井を眺めながらシャルルに問いかける。

「案は3つほどあるけど・・・シャルルはなにか案ある?」

「私ですか?・・・せつかく始祖精霊と会えたんですしこれを機に世界にいる始祖精霊を巡る旅はどうです?」

シャルルはかわいらしく小首をかしげながら提案してくれたので抱きしめたくなる衝動を必死に抑えながら返答した。

「シャルルも私と同じ考えなんだ」

私の答えにシャルルは目を見開き、口元を優雅に手で押さえながら言った。

「あら、明日香もですか」

「うん。あとの2つは長老に頼んでここに住まわせてもらうのと、

ここを出て人里で暮らす、かな」

「それもいいですね」

たしかにその2つもいいけど私の中ではもう決まってるんだよね!

「まあその2つも言っというてなんだけどね?私の中ではもう決まってるの」

「じゃあそれにしましょうか」

シャルルは内容も聞かずに同意するものだから私は思いがけず素っ頓狂な声を出してしまった。

「ふえっ!内容も聞いてないのに私の案に賛成してくれるの?」

私の言葉にシャルルは当然だとばかりに胸を張って答える。

「私は明日香と契約を結びました。だから明日香について行くのは当然ですよ」

私はシャルルの言葉に思わず目から涙があふれてきた。

「……ぐずっ、う、うえ……」

「あ、明日香?! どうしてなくんですか?! ええと、こんな時どうすれば……」

シャルルはいきなり明日香が泣きだしたからどうしていいのかわからずおろおろとするばかりだ。

シャルルがおろおろしていると明日香がいきなりシャルルに抱きついてきた。

「明日香? どうし」

「……シャルル、ありがとうね」

明日香はシャルルの言葉をさえぎって感謝の気持ちを伝えた。

明日香 side

「私は明日香と契約を結びました。だから明日香について行くのは当然ですよ」

私はシャルルのこの言葉を聞いた瞬間、今まで味わったことのないくらいの心が温まる気持ちを実感した。

その気持ちを実感した途端、いきなり目頭が熱くなってとめどなく涙が頬を伝っていく。

シャルルに心配かけまいと必死に止めようとしたがそれでも止まらず涙はいつまでも流れる。

そんな私を見たシャルルはどうしていいのかわからないのかさつきからずつとおろおろしている。

……ありがとう、今までこんなに心があつたまることなんてなかった。シャルルが私にこの気持ちをプレゼントしてくれたんだ。

そう思った途端、私は思わずシャルルを抱きしめていた。

シャルルが何か言っていたがそれをさえぎって微笑みながら『ありがとう』と感謝の気持ちを伝えた。

顔をあげるとシャルルの顔が近くにあった。

その表情はどこか嬉しそうな表情をしていた。  
そして、私はもう一度シャルルに『ありがとう』と言った。

end

シャルル side

私の言葉を聞いた明日香はいきなり泣き出してしまったからどうしていいのかわからなかったのでおろおろしていました。  
そうしていると明日香はいきなり私に抱きついてきました。  
どうしたのか聞くと私の言葉をさえぎり、ありがとうと女神のような微笑みを浮かべながら私に言うてきました。

明日香はとても可愛いので微笑まされると鼻血が出そうになっちゃいます。

それと同じくらいに明日香の言葉に対して嬉しく思う気持ちが私の中にあつたので私の意図せず私は微笑んでいました。

明日香は私に受け入れてもらえてうれしかったのかももう一度『ありがとう』と言って泣き疲れたのか私の腕の中で眠りにつきました。

end

少女たちのこれから（後書き）

今回は明日香とシャルルの絆を確かめ合った回でした

感想を貰えると励みになりますので待ってマース？！

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2559t/>

---

神と精霊に愛された少女

2011年6月11日18時49分発行